

英語は謎解きが面白い

平野 信輔

なぜ翻訳をやっているのか。顧みるに、「謎解きが面白い」というのが大きな理由に思える。意味不明な和文を試行錯誤しながら解読し、誰が読んでもわかる英語にできた時は、やけに満足感があるものだ。使う人がそれをわかってくれて、労いの言葉でもかけてくれれば、もう幸せこの上ない。この快感、何物にも代えがたし。

さて、この英語の「謎解きの面白さ」を一番最初に感じたのは、小学生のころだ。

きっかけは、ひとつの "the" なのである。当時はスーパーカーブーム。男の子たちは、みんなよく分りもしないくせに、馬力がどうの、排気量がどうのという話をカードを持ち寄ってしていたものだ。私も、お小遣いをはたいてカードのセットを買った。記憶は定かではないのだが、各ページを引っ張ると切り離せるようになっていた、本のような体裁のものだった。その裏表紙か何かに英語で「THE SUPER CAR」と書いてあったのだろう。それが私と the の最初の出会いだ。

「ティー・エッチ・イー」ってなんだろう？その素朴な疑問を持ったことを、なぜかはっきりと覚えている。ローマ字は習っていたけども、ローマ字の中には出てこない組み合わせだから読み方がわからない。「タへ」？「トへ」？いったいどう読めばいいのか、妙に気になったのである。小学生のくせにこんなことが気になるあたり、何か英語にひきつけられる遺伝子でも元々持っていたのかもしれない。

さらに続けて SUPER も読んでみようとする。「ス…ペ…」今度は R でつまづく。「スペル？スペラ？」次の CA も、「ア段なのかなあ」とは思うもののどうしようもない。いや、CAR の 3 文字はどこかで見た気がする…というかよく見る気がする…自動車の本によく出てこないか？ひょっとして、「カー」なのか？おっ、「カー」なら「ア段」じゃないか。ってこと

は、R はひょっとして、「一」のこと？でも「一」は横線を字の上に引くんじゃなかったっけ？大体なんで K じゃなくて C なの？…謎は深まるばかりである。

が、ひらめきは突然やってくる。「ス、ペ…カー」…「スーパーカー」！「パー」って、やっぱり R は伸ばすんじゃない！いや、でも「ス」の後には R がないなあ。でも、これは絶対「スーパーカー」って書いてあるんだ！スーパーカーのカードだし、間違いない！…「SUPER CAR = スーパーカー」ということは、根拠もなくせにここで確信してしまったのだ。

残るは THE だが、これもしばらくしてひらめいた。…このカードブック、「ザ・スーパーカー」だっけ？じゃあ、THE は「ザ」って読むのか？よく大人の人たち、カタカナ語に「ザ」つけるもんなあ、意味分かんないけど。でもなんで「エ段」じゃないの？まあいいや、なんか「ザ」つけると「カッコイイ」感じもするし。

と、また、根拠のない確信である。でも確信であるには違いなく、翌日になったら、学校で「ティー・エッチ・イーはザって読むんだぜ」なんて友達に吹聴していたような記憶もある。

なんにしても、頭を使って謎解きをするのは、解ければ快感である。宝のありかを示した古文書を自力で読み解いたような感覚だった。

ただ、同時にこんな風にも思っていた — ひょっとして、世の中には学校で習った以外になんか別の種類のローマ字があるの？てことは、その内、また新しいのを覚えさせられるの？うげっ。…それが「別の種類のローマ字」ではなく英語というものだとはっきり認識するのは、まだ数年先のことである。

以来、数十年。英語の謎解きは玉ねぎの皮をむくが如し、ひとつわかれば次の謎が見えてくる。終りのない楽しみといおうか、苦しみといおうか、やめられないのである。

(大阪工業英語研究会講師)